



375 講談社現代新書

日本文学二五五日

上



『金色夜叉』の
一月十七日や、
『君の名は』の
五月二十四日を
まつまでもなく、
日付が

重要な意味をもつ文学作品は数多い。本書は、日本近代文学の

遺産のなかから、二二八人の作家による日付をもった作品三六六を

選んで順次配列、日付というフィルターを通して二日二つずつの作品世界へ

招待する興味あふれる案内書であり、かつ、

板坂元

ユニークな日本文学歳時記。上巻は二月―六月を収録。

日本文学三六五日—㊤

昭和四九年十二月一〇日第一刷発行

著者—板坂 元

©Gen Itasaka 1974 Printed in Japan



発行者—野間省一 発行所—株式会社講談社

東京都文京区音羽二—三—三 郵便番号二三 電話〇三—九四—二二 振替東京三三〇

装幀者—杉浦康平 協力—辻修平

印刷所—日大印刷株式会社 製本所—株式会社大進堂

●—定価はカバーに表示してあります

落丁本・乱丁本はおとりかえします(学1)

板坂元



三六五日 — 上

まえがき

文学作品を土地と結びつけておぼえることが多い。詩碑・歌碑などの文学碑が全国いたるところにあるのもその証であろうし、『挽歌』『たけくらべ』『伊豆の踊子』『二十四の瞳』と、思いつくままに並べてみれば、われわれの記憶が、いかに場所と緊密に結びついて行なわれているかがわからう。

それに比べて、一年のその日その日と結びつけて文学作品を記憶し想起することは、ひじょうに少ない。本書では、その少ないほうのおぼえかたをとって、近代文学の名作や問題作、あるいは近代文学史上のできごとを一年三百六十五日（厳密にいえば三百六十六日）のそれぞれにあてはめて配してみた。一日一日を思い出のよすがとする面白さ楽しさも、近代文学の理解鑑賞のよきたよりとなると思ったからである。

編集にあたって立てた原則は、数えるほどしかない。まず、一作品は一回だけ、つまり一分としてしか使わないということを経第一の条件とした。大著となれば記録すべき日付も何カ所もあるものだが、変化を求め、またできるだけ多くの作家作品をおさめるためには避けたほうがよいという考えから、そうすることにした。

つぎに、できるだけ名作・問題作を収めることにして、作者の名前を多くすることは二次のこととした。百人一首のように一人一作で三百六十五日を埋めることは不可能ではないかもしれないけれども、いきおい現代読者に縁遠い作品が多くなる。それを避けるために、けっきょく作者の数は、ぜんぶで二百二十八名になった。数人の作家は、多くて七回という頻度になっている。

おなじ考えから、同一日に何点も作品が鉢あわせする場合には、現在、文庫本として流布しているものを優先してとる、ということも何回となく実行した。

第三に、時代小説の日付は、作品中のままとして、太陽暦に換算することはしなかった。忠臣蔵や宮本武蔵を太陽暦に直すのは、歴史年表なら意味のあることだろうが、文学作品をあつかうときには、興ざめになることというまでもない。

だいたい右のような約束だけで編集したもののだが、もっとも苦心したことは、作品中に日付を書き入れない、あるいは書き入れることの稀な作家の作中に日付を見つけることだった。作品中に日付のあるかないかは、その作家の才能にも作品の良否にも、まったくかわりのないことはもちろんだが、作者のリストを見ていて、何人かの当然名前を連ねるべき作家の名前の漏^もれているのは、何とも残念なことに思われた。詞華集でもなく顔見世興行でもない本ではあるが、漏れた作家、たとえば、小島信夫・吉行淳之介・古井由吉などの名前を思いだすとき、

玉の盃底なきが如き思いを、いまだに拭い去りきれない。

さいごに、できるだけ多く名作・問題作をおさめた本書を読まれる方には、だいたい何冊くらい読んだことがあるか、という疑問が当然のこととして起こると思う。全体を見渡した上で、教養としては百冊ぐらい、文学愛好者としては二百冊ぐらい、日本文学専門の人は三百冊ぐらいがメドと考えるが、いかなものである。冊数をふやすためにこれから読む、というのは邪道であるが、本書を手がかりとして近代文学により多く親しむ機会をつくる人が多くなることがあれば、編者としては望外の喜びである。

目次へ日本文学三六五日 ㊤

まえがき 3

1月 9

2月 41

3月 71

4月 103

5月 135

6月 167

人名索引 200

書名・作品名・事項索引 204

近代文学史ノート① 明治の文学 134

へ7月、12月および近代文学史ノート②③は下巻収載

凡例

- 一、本書は、一年三六六日に関する作品を選び、一月一日から十二月三十一日まで順にならべてある。
- 一、編成の都合上、一月一日～六月三十日を上巻、七月一日～十二月三十一日を下巻に収めた。
- 一、時代小説の日付は、作品中のままの太陰暦とした。
- 一、見出しは作品と日付との関連を主体につけてある。
- 一、書名・雑誌名は『 』、単行本化されていない日記・書簡は「 」でかこった。
- 一、文末に作品の初出・刊行資料と現在手に入れやすい版へ文庫版があれば文庫版の紹介を加えた。初出資料は主として『新潮日本文学小辞典』によった。
- 一、収録作家の顔写真の下に生没年月日を入れた。巻末人名索引とあわせ利用してほしい。

イラスト(カバー・本文とも) 林静一



- 1 — 森鷗外・舞姫
- 2 — 井伏鱒二・ジョン万次郎漂流記
- 3 — 獅子文六・大番
- 4 — 大西巨人・神聖喜劇
- 5 — 木村毅・旅順攻囲軍
- 6 — 船山馨・石狩平野
- 7 — 高橋和巳・邪宗門
- 8 — 石川達三・生きてゐる兵隊
- 9 — 伊藤整・日本文壇史
- 10 — 有馬頼義・兵隊やくざ
- 11 — 倉橋由美子・夢の浮橋
- 12 — 石牟礼道子・苦海浄土
- 13 — 松本清張・点と線
- 14 — 戸川昌子・獵人日記
- 15 — 佐藤愛子・花はくれない
- 16 — 江馬修・山の民
- 17 — 尾崎紅葉・金色夜叉
- 18 — 瀬戸内晴美・遠い声
- 19 — 中山義秀・寿永の春
- 20 — 住井すゑ・夜あけ朝あけ
- 21 — 吉屋信子・底の抜けた柄杓
- 22 — 田山花袋・蒲団
- 23 — 新田次郎・八甲田山死の彷徨
- 24 — 野上弥生子・秀吉と利休
- 25 — 大岡昇平・俘虜記
- 26 — 松本清張・小説帝銀事件
- 27 — 加賀乙彦・帰らざる夏
- 28 — 谷崎潤一郎・鍵
- 29 — 美濃部亮吉・苦悶するデモクラシー
- 30 — 森鷗外・半日
- 31 — 徳永直・静かなる山々

1月1日

森鷗外『舞姫』

愛する人との別れ

太田豊太郎は、法科出の秀才で、母親の希望と官庁の上司の期待を双肩に、ドイツに留学した。けれども、西欧の大学の自由な風に接して、立身出世の道を脱落する。官庁は免職になり、偶然に知りあった美貌の舞姫エリスと同棲生活をはじめた。

学問は荒み、屋根裏部屋でのエリスとの生活は、精神的には豊かでも、貧寒をきわめた。折りから、明治二十一年の冬、豊太郎は旧友相沢からの手紙を受けとった。日本から昨夜ベルリンに着いた天方伯あまかたに同行して自分もこちらに來た、天方伯が君にも会いたがっておられるから、ぜひホテルに來るように。手紙にはそう書いてあった。

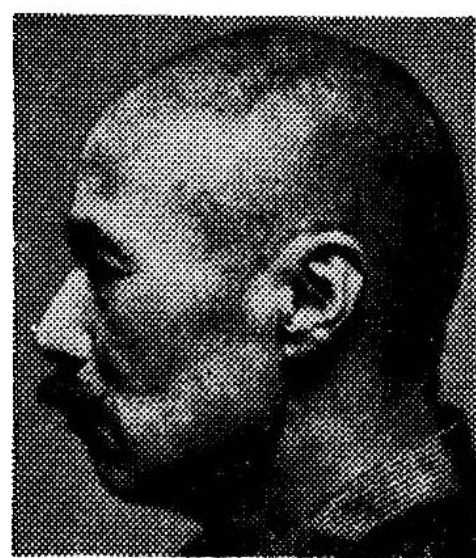
天方伯からは、翻訳の仕事をもらったり、通訳の

仕事をしているうちに、ひと月ばかり過ぎた。と、ある日、突然、天方伯は「明日ロシアに向かうが、いっしょに随行してくるか」と問いかけられた。

ロシア滞在中、豊太郎はエリスへの愛と故国への帰心とに千々に乱れ、心弱い自分を痛感せざるをえなかった。

大臣一行とベルリンに着いたのは、元日の朝であったが、停車場からエリスのもとに駆けつけた。家に入ってみると、エリスはおむつを山のように積んで二人の間の子供の生まれるのを待ちこがれている

様子。豊太郎は、日本に帰る決心のほどを口に出せなかった。



1862・1・19~1922・7・9

●明治二十三年一月、国民之友。新潮・角川各文庫収録

1月2日

井伏鱒二『ジョン万次郎漂流記』

先覚者となつた漂流者

嘉永四年一月二日、ジョン万次郎、伝蔵、その子五右衛門の三人は、琉球国沖縄島の南端に上陸した。直ちに薩摩の役人の取調べを受け、十月によりやく長崎へ送られ漂流口書を取られた。じつに十年ぶりの日本であつた。土佐国幡多郡中の浜に生まれた万次郎は、十五歳の正月、四人の仲間とともに漁に出て遭難し、無人島に漂着した。六ヵ月後に米国の捕鯨船に救助され、ホノルルに連れられてゆく。やがて万次郎は船長の好意でマサチューセッツ州ヌウ・ベットホルドに行き、農作牧畜の余暇に、数学、測量などを学んだ。いつの間にかジョン万と呼ばれるようになった。その捕鯨の技倆と胆力を買われて、再び捕鯨船に乗り組んで活躍、副船長にまで

なつた。しかし日本に帰る機会はつかめなかつた。望郷の念のつゝる彼はゴールドラッシュの西海岸で働き、ホノルルで伝蔵親子と再会し、ようやく帰国することができたのである。

嘉永六年ペルリ来航以来、中の浜の万次郎は多忙となつた。御普請役格となり、万延元年には咸臨丸で再渡米し、福沢諭吉とウエブスターの辞書を一冊ずつ求めた。

帰国後、万次郎は捕鯨業を経て、箕作麟祥らに英語を教え、明治元年、開成学校中博士六等出仕となる。辞任後、彼は欧米をふたたび訪れ、旧知を訪ねている。



『ジョン万次郎漂流記』表紙

●昭和十二年二月、河出書房。筑摩書房、井伏鱒二全集。

1月3日

獅子文六『大番』

手活けの花に囲まれて

昭和二十八年、初立会からの暴騰で、ギューちゃん赤羽丑之助は十四億の儲けを得た。53年型のリンカーンを四百五十万円で買入れる。世話する女性も七人に増加、鶴見ゴルフ・クラブの会員にもなった。株師ギューちゃんも、いまや大丸証券KKの社長で、従業員も七十名近くになった。

この年、株の暴落で九億円の損をするし、ゴルフ場で野糞をして除名処分にもなったが、ギューちゃんの士気はおとろえない。逆に自分のゴルフ場をつくるといった工合。そして、年の暮れの変動で、また四億円もうけ、意気さかなうちに昭和二十九年の正月を迎える。

一月三日は、松涛町しょうとうの自宅で大丸証券の全員を集

めて盛大な新年会を行った。

長年苦勞を共にしてきた主婦代わりのおまきさんは、本来ならばわが世の春を楽しむところなのだが、機嫌が悪い。それもそのはず、社員だけでなくギューちゃんは、世話している女性をぜんぶ呼び集めたからだ。湯河原の小花、芸者の梅香、村木悦子、飯塚テルミと、めいめいギューちゃんからもらった一カラット半のダイヤの指輪をはめて、和洋とりどりの盛装で居ならぶ。



1893・7・1～1969・12・13

丑之助は顔じゅうの紐を緩めて、手活けの花を見回しながらはばかりことなく悦に入った……。

●昭和三十一年二月
三十三三年四月、週刊朝日、新潮・角川各文庫収録

1月4日

大西巨人『神聖喜劇』

生と死の間の苦悶

（夜。旅館二階東表^{ひがしおして}八畳の部屋。中央の卓上に、四、五本の徳利、二つの盃、数個の皿、小鉢など。下手に床の間。正面後方（東側）と上手とに、障子が閉ざされている。障子のうしろに、広いまわり縁、ガラス戸。東側の戸障子が開かれたら、向うに長門の海が望まれるはず。波のひびき。）

マッチ擦るつかの間海に霧ふかし

身捨つるほどの祖国はありや

寺山修司

太平洋戦争がはじまって、約ひと月。東堂太郎は勤めている新聞社の最後の勤務を終えて、同僚の一人と牡蠣^{かき}料理を肴に酒を飲み、その料亭「安芸^{あき}」の

主人の姪^{めい}である女性と、省線連絡船で、関門海峡を渡る。

彼女は東堂より五つ年上、彼女の良人^{おつと}は日華事変二年目に戦死をしている。召集されて間もなく入営する東堂と、戦争のために未亡人になった彼女は、小糠雨^{こぬか}の降る海峡を渡って下関の旅館で最後の一夜を過ごした。この戦争で死ぬことは非業の犬死であろうけれども、そこにそうとうな合一感をもって戦死するということがあるまい。そういう彼女の見解に、東堂はなにか片意地に食い下がって行く。昭和十七年一月四日のことであった。



1919・8・20～

●昭和三十五年十月
。新日本文学。光
文社刊、カッパ・ノ
ベルス。（未完）

1月5日

木村毅『旅順攻囲軍』

空しき弾丸の跡

周囲は高い土塀で囲まれた家で、門を入ると小広い庭がある。ステッセル將軍は馬をおりて庭を一通り見廻すと、左手の隅に葉をふるい落した棗なつめの木が立っていたので、手ずからそれに馬をつないだ。棗には、その幹の肌を荒らして、無数の弾痕が打ちこまれている。將軍は感慨深げにそれを眺めてから控室へ入った。

乃木將軍の指揮する第三軍が旅順攻囲の陣をしいたのは、明治三十七年六月であった。以来半年、攻囲軍はいたずらに損害の大きい総攻撃をくり返していた。十一月に入つて要衝二〇三高地を占領したものの、味方の死傷はすでに数万を数えていた。乃木將軍自身もこの戦線で二人の愛息を失い、憔悴の色

が濃かった。「天長節までには」、「年内には……」と期待した国民の失望は大きく、將軍の無能を責める声は大本営内部にも高まっていた。

明治三十七年がこうして暮れた、翌元日の未明、一部の部隊が独断で敵の望台を攻撃、これに応じた他の諸部隊が期せずして総攻撃を展開した。この一日の戦いで戦局は逆転し、さしもの要塞も同日夜刻ついに陥落した。

乃木將軍が敵將ステッセルと水師營の民屋に会見し、たがいの武勇をたたえ合つたのはその五日後の



1894・2・12～

一月五日、時刻は午前十一時三十五分から午後一時まで。快晴の日であった。

●昭和十年三月、講談社。

1月6日

船山馨『石狩平野』

雪の国境線を越えて

新協劇団の演出家杉本良吉と女優の岡田嘉子が、樺太半田沢の国境からソ連領へ越境入国した事件は、昭和十三年正月のできごとだった。

杉本と岡田は大晦日から敷香町の山形屋旅館に泊っていたが、二日の朝、国境警備隊を慰問すると言って馬檻で気屯まで行き一泊、三日朝、ふたたび馬檻で半田沢国境に着いて、警備隊員の案内で国境線近くを見て歩いているうちに、突然隊員の隙をねらって手を取りあって雪の国境線の向こうへ走り去った。杉本はそのとき三十二歳、岡田は三十八歳。新聞には一月六日の日に報道された。

杉雪子は、この新聞を見て、この男の人は吉岡さんでないかしらと思った。雪子の弟である直記が中

学生だったころ、よく出入りしていた「シャルマンカ」という創成川畔の店の常連に吉岡芳夫という人がいて、演劇の研究会をやっていた。雪子も何度か見かけたことがある。

杉本良吉の写真は、その吉岡にそっくりだし、本名も同じ。きっとあの北大生の吉岡さんだろう。弟の直記に知らせてやろうか。

しかし、その弟も、いまは出征していて、まだいちども便りがないままだった。

石狩川のように、流れつづける杉一家の、明治・



1914・3・31～

大正・昭和三代の一頁のできごとである。

●昭和四十年七月～四十一年八月、北海道タイムス。新潮文庫収録